

## 象形文字ルウィ語の通時的考察

— initial-*a*-final と r 転化を中心にして —

大 城 光 正

### 1. はじめに

象形文字ルウィ語の言語資料の大半は、紀元前 1200 年頃のヒッタイト王国滅亡の後に、北シリア、南西アナトリア地域において建国されたルウィ系民族による都市国家群の地域で発見される石碑文（約 300 碑文）である<sup>1)</sup>。その中でもルウィ系の新ヒッタイト文化（鉄器時代）成立、繁栄から滅亡の時代（紀元前 1000 年頃からアッシリア王 Sargon 2 世による支配で終焉した紀元前 717 年まで）に作成された碑文がその大部分を占めているが、碑文の成立年代が特定できないものが多いために、象形文字ルウィ語の通時的な考察はヒッタイト語の同考察に比べると、ほとんど皆無に近い状況である。そこで、本稿では象形文字ルウィ語の言語的変遷を明証するために、D. J. Hawkins (2000) の編集本において最も信頼できるカルケミシュ (KARKAMIŠ) 碑文の成立年代を基にして、同碑文中に散見される言語的特徴を抽出分析することで、同言語の変遷の一端を明らかにしてみたいと思う<sup>2)</sup>。特に、同碑文に散見される象形文字ルウィ語の特異な表現形式としてしばしば引用される、非常にユニークな表記法の initial-*a*-final と、他の諸言語にも散見される r 転化現象を中心に考えてみたい<sup>3)</sup>。

### 2. カルケミシュ (KARKAMIŠ) 碑文の成立年代

カルケミシュの王家時代区分、国王在位期、同在位中に作成された碑文名は以下のとおりである。

古期碑文 (BC. 11/10C) : A4b 碑文

Suhi 王家 (970-870BC)

Suhi I 世 (BC. 10C) : φ

Astuwatamanza (BC. 10C) : A14b 碑文

Suhi II 世 (BC. 10C) : A1a 碑文

Katuwa (BC. 10-9C) : A2+3 碑文 ; A11a 碑文 ; A11b+c 碑文 ; A12 碑文

Sangara 王 (?) (870-840BC?) : ?

Astiru 王家 (840-740BC)


Yariri (BC. 9 末期-8C 初頭): A6 碑文; A15b 碑文

Kamani (BC. 8C): A31 碑文; CEKKE 碑文

Pisiri (?) (740-717BC): A21+A20b 碑文



### 3. カルケミシュ (KARKAMIŠ) 碑文の特徴<sup>4)</sup>

#### (1) initial -a- final


象形文字ルウィ語の文字表記において、従来、非常に特異な表記法が示唆されてきた。語頭音の a- を表記する場合、当然のこととして、語頭に a の音節文字 (象形文字番号 Nr. 450 ) が表記されるべきであるが、この文字が語頭ではなく末尾に表記されるというものである: 例えば、文導入辞 awa (音節文字表記 \*a-wa > wa-a)。最初の指摘は Laroche が 1956 年の論文 (p. 136) の中で指摘している: 「Aleppo 碑文の ki-*TESUB*-pa-a の表記は人名 \*Aki-Tešub を示すもので、末尾の -a は正確には語頭に表記されるべきもの = \*a-ki-*TESUB*-pa」。その後、この指摘を支持するような用例が、カルケミシュ碑文を含むルウィ系の都市国家群の地域の出土碑文のみならず、Meskene 出土の印章やヒッタイト王国時代の岩壁碑文 (Nišantepe 碑文等)、更にはヒッタイト王国時代の Emirgazi や Yalburt の碑文においても確認されることから、この特異な表記法 (専門用語としては確立していないので、便宜上、“initial -a- final” と呼称) は古い時期からの表記法を示唆している。






そこで、上記の指摘の妥当性を検証するために、碑文成立年代がほぼ明確なカルケミシュの碑文を通時的に比較検討してみたいと思う。特に比較考察が確認しやすい文導入辞の a- の表出例に限定して例示してみる (initial-a-final は末尾に -\*a で表示) <sup>5)</sup>。





#### 古期碑文








◎ A4b: wa/i-tá- (×2)、wa/i-tu-tá-; wa/i








#### Suhi 王家

◎ A14b: wa/i-tú-; a-wa/i

◎ A1a: wa/i-sa- (x2)、wa/i-tú- (x3)、wa/i-mu-、wa/i-ta-、wa/i-mi-i-  
; a-wa/i (x6)

◎ A11a: wa/i-mu- (x2)、wa/i-mu-ta-、wa/i-tú-ta- (x4)、wa/i-tà- (x3)  
; a-wa/i (x2)

◎ A11b+c: wa/i-sa-、wa/i-tú- (x2)、wa/i-ma/i-ta- (x4)、wa/i-na-  
wa/i-ma-na-、wa/i-ma-zá-、wa/i-ta- (x2); a-wa/i (x6)

◎ A2+3: wa/i-mu-、wa/i-sa- (x4)、wa/i-tú- (x2)、wa/i-mu-ta-  
wa/i-tú-ta-、wa/i-tà-tá-、wa/i-ta- (x2); a-wa/i (x3)

◎ A12 : wa/i-tú-wa/i-na<sup>\*a</sup>、 wa/i-mu-tá<sup>\*a</sup>、 wa/i-tú-ta<sup>\*a</sup>、 wa/i-tá<sup>\*a</sup>; a-wa/i  
Astiru 王家

◎ A6 : a-wa/i(x4), wa/i-ma-ta<sub>5</sub>, wa/i-ta(x2), wa/i-sá(x2), wa/i-ná(x2),  
wa/i-tú-u, wa/i-ara/i

◎ A15b : a-wa/i, wa/i-ta(x3), wa/i-sá(x2), wa/i-mu-tá, wa/i-mu-u(x3)

◎ A31 : a-wa/i, wa/i-tú, wa/i-tú-tá, wa/i-mu, wa/i-ra+a

◎ CEKKE : a-wa/i(x4), wa/i, wa/i-ma-za, wa/i-ta(x3), wa/i-tú-ta

◎ A21+A20b : wa/i-mu(x2), wa/i-mu-tá, wa/i-tá-na

カルケミシュの古層碑文である A4b 碑文においては、wa/i-tá<sup>\*a</sup>(×2)、wa/i-tu-tá<sup>\*a</sup>の計 3 例（本来の語形表記では、\*a-wa/i-tá、\*a-wa/i-tu-tá）の initial-*a*-final が散見される。しかしながら、wa/i という文導入辞\*a-wa/i の語頭 a の省略形で initial-*a*-final が見られない例もあるので同現象の混用と見做される。

その後の Suhi 王家の時期に作成された A14b 碑文では、initial-*a*-final の表記例としては、wa/i-tú<sup>\*a</sup>の例が確認されるが、a-wa/i という本来の語形表記を忠実に表出した例も確認される。この表記は古層の碑文 A4b 碑文における a-wa/i の initial-*a*-final の省略形 wa/i と相違している。A1a 碑文では、wa/i-sa<sup>\*a</sup>(x2)、mu-pa-wa/i<sup>\*a</sup>、wa/i-tú<sup>\*a</sup>(x3)、wa/i-mu<sup>\*a</sup>、wa/i-ta<sup>\*a</sup>、wa/i-mi-i<sup>\*a</sup> の用例が確認されるが、a-wa/i(x6) のような initial-*a*-final ではなく、正確な語頭 a-表記の語形も散見される。このような initial-*a*-final の特異な表現形式と語末の-a を語頭 a に移動した表記の混用の碑文は A11a 碑文、A11b+c 碑文、A2+3 碑文、A12 碑文においても確認される。

その後の Astiru 王家の時期に作成された碑文では、initial-*a*-final の表記法は一例も確認されない。A6 碑文では、a-wa/i(x4)、wa/i-ta(x2)、wa/i-ma-ta<sub>5</sub>、wa/i-sá(x2)、wa/i-ná(x2)、wa/i-tú-u、wa/i-ara/i のような用例が認められる。Suhi 王家の時期と相違して、この時期の碑文には initial-*a*-final の表記法が確認されない。a-wa/i のような正確な音節文字表記と wa/i-ta、wa/i-ma-ta<sub>5</sub>、wa/i-sá、wa/i-ná、wa/i-tú-u、wa/i-ara/i のような語頭 a の省略形のみである。これらの省略形は語頭 a からの省略ではなく、以前から採用されていた initial-*a*-final の表記法の末尾-a の省略、つまり後代の書記はこの特異な表記法の認識の欠如によって省略したものと推察される。A15b 碑文、A31 碑文、CEKKE 碑文も同様の傾向を明確に示している。更に、カルケミシュ最後の王 Pisiri の時期に作成された A21+A20b 碑文に於いても同様の傾向を示している。

以上のことから、initial-*a*-final の表記法はヒツタイト王国時代から採用されていた特異な表記法であったが、時代の推移とともに後代において衰退傾向となり、Astiru 王家（紀元前 9-8 世紀）の時期にはこの表記法は完全に使用されなくなっている。さらに、通時的な変遷を考慮すれば、本来の文導入辞 awa が initial-*a*-final によって、wa<sup>\*a</sup>とな

り、末尾要素の-\*a の initial-~~a~~-final の表記の意味が不明瞭になって省略されて文導入辞 wa となる過程（つまり a-wa > wa-a > wa）が推察される。

つまり、Suhi 王家の時期の正式な a-語頭表記と initial-~~a~~-final の混用、その後の Astiru 王家の時期の正式な a-語頭表記と initial-~~a~~-final 表記の語末-a の省略の混用の様相から、initial-~~a~~-final という特異な表記法が、Astiru 王家の時期を境にして変容しており、このことは同表記法が象形文字ルウィ語の通時的な言語的特徴の指標として有力なことを示している。

## (2) r 転化

象形文字ルウィ語の表記法において、上記の initial-~~a~~-final と並んで、特徴的な表記法として例示されるものに、r 転化 (rhotacism) が挙げられる。この表記は母音間の有声子音(主に-d-)を-r-で表出するものである。特に語頭には表出されないので、象形文字ルウィ語表記においては、前接的人称代名詞-ata/-ara、奪格の単数/複数語尾-ati/-ari、3人称単数/複数現在形語尾-ti/-ri、3人称単数過去形語尾-ta/-ra、3人称単数命令形語尾-tu/-ru において生起する現象である<sup>6)</sup>。そこで、象形文字ルウィ語碑文のカルケミシュ碑文を成立年代順に通時的に r 転化現象の有無を観察した結果が以下のとおりである。

### 古期碑文

◎ A4b 碑文： r 転化表記なし

### スヒ王家

◎ A14b 碑文： r 転化表記なし

◎ A1a 碑文： r 転化表記なし

◎ A11a 碑文： r 転化表記なし

◎ A11b+c 碑文： r 転化表記なし<sup>7)</sup>

◎ A2+3 碑文： r 転化表記なし

◎ A12 碑文： r 転化表記なし

### アスティル王家

◎ A6 碑文： zi-pa-wa/i-ra/i (<\*zin-pa-wa-ata “and on the other hand-it”)  
wa/i-ara/i (<\*wa-ata “and-it”)

◎ A15b 碑文： r 転化表記なし

◎ A31 碑文： ni-pa-wa+ra/i (<\*nipa-wa-ata “and or-it”)  
wa/i-ra+ta (<\*wa-ata “and-it”)

◎ CEKKE 碑文： “ARGENTUM”-ri-i (<\*“ARGENTUM”-ti “of silver”)

zi-la-pa+ra/i-ha+ra/i(URBS) (<\*zilapalaha-ti “from the city Zilaparaha”)

á-pa-ku-ru-tà-ri+i(URBS) (<\*apakuruta-ti “from the city Apakuruta”)

za+ra/i-ha-nu-ri+i (URBS) (<\*zarahanu-ti “from the city Zarahanu”)  
 sa<sub>5</sub>+ra/i-mu-tara/i (URBS) (<\*sarmuta-ti “from the city Sarmuta”)  
 i-sa-tara/i (URBS) (<\*isata-ti “from the city Isata”)  
 MALUS-hi-tà-ri+i (<\*MALUS-hita-ti “with malice”)

◎ A21+A20b 碑文：r 転化表記なし

上記の r 転化現象の有無による分類から、ほぼ明確な結論を導くことが可能である。つまり、先述の initial-*a*-final の後代における出現の衰退傾向とは逆に、r 転化の表出は後代に作成された碑文ほど表出傾向が顕著になっているということである。その時代区分の境目に当たる時期が、initial-*a*-final の衰退時期と一致して、Astiru 王家の時期から r 転化の出現時期が顕著になっているということである。上記の A15b 碑文と A21+A20b 碑文の碑文にも当然のように r 転化現象が表出すべきであるが、これはこれらの碑文内容箇所象形文字での記述で r 転化語形が生起していないものであり、同碑文作成時期に r 転化の記述法が存在していなかったことを示すものではない。その証拠として、A15b 碑文の作成時期 (Yariri 王の時期) の A24 碑文と TUNP 1 の碑文には r 転化表記が散見されるし、最も後代に作成された A21+A20b の碑文時期 (Pisiri 王の時期) に相当する A25b 碑文と A13a-c 碑文においても r 転化表記が散見される。それ故、r 転化表記は Astiru 王家の時期 (紀元前 9 世紀末から 8 世紀初頭、つまり紀元前 900 年頃) 以降に顕著に現われる特徴ということが、カルケミシュ碑文の成立年代別の分析から確認される。r 転化の用例は Morpurgo-Davies の指摘とは相違して、カルケミシュ碑文において確認できるものは、前接的人称代名詞の 3 人称単数中性対格形-ata と名詞単数奪格形語尾-ti に限られている。

#### 4. おわりに

上記のことから、initial-*a*-final の生起の時代的な変遷傾向である同表出の後代における出現の衰退傾向とは逆に、r 転化の表出は後代に作成された碑文ほど表出傾向が顕著であることが指摘される。その時代区分の境目に当たる時期が、initial-*a*-final の衰退時期と一致して、Astiru 王家の時期から r 転化の出現時期が顕著になっているということである。つまり、Suhi 王家から Astiru 王家への変遷の時期が同時に言語的な時代変化の時期に対応するということが、それは Suhi 王家以前の古層の言語的特徴の保持と Astiru 王家以降の新しい言語的改新傾向が言語の時代区分上明確になっている。カルケミシュの国家に関するアッシリア文書では、Suhi 王家と Astiru 王家の間の紀元前 870-840 は Sangara 王の治世という記述がある。しかしながらこの王に関する記述は、カルケミシュの象形文字ルウィ語碑文には存在しない。アッシリアの記録によれば、同王はサマル、ウンキ、ビート・アディナ、キリキアと同盟を結んで、広範な外交政策を実施した王で周囲の諸国と

活発な交流があったことが推察される。おそらく、この拡大政策がカルケミシュの言語にも大きな内的変化を蒙る結果になったものと考えられる。それ故、Sangara 王の在位の紀元前 870-840 年の期間がカルケミシュにおける新旧の言語的特徴の交代時期に相応することが傍証されると言えよう。今後は Sangara 王の時期の前後において、何故に新旧の言語的な変化が生じたかを周辺地域から出土した碑文分析を通して明らかにする必要がある。

## 注

- 1) ヒッタイト王国時代滅亡以前のヒッタイト王・王妃の印章やヒッタイト王による岩壁や石室の碑文等は難解なものも多く、完全な解明には至っていないのが現状である: Poetto(1993); Hawkins(1995) 参照。
- 2) Hawkins(2000:72)による Genealogical fragments, Non-royal inscriptions, Miscellaneous 等の碑文はほとんど断片的なもので、本稿では比較考察の対象にしない。更に、カルケミシュ以外の碑文言語の特異な言語的特徴の抽出の試みについては Oshiro(1993), (2008), (2010) 参照。
- 3) 専門用語としては確立していないので、便宜上、“initial-~~a~~final”の呼称を使用: 特に、Hawkins(2003:159-161); Melchert(2003:209-210); Payne(2004); 大城(2008) 参照。
- 4) Hawkins(2000:72-223): 同資料の大半は国王碑文。なお、ASSUR 書簡文書はカルケミシュ商人による作成資料で、戦利品として当時のアッシリアの都アッシュールに運び込まれたものであるが、正確な作成年代が不明のため本稿の考察対象からは除く。
- 5) 前接的人称代名詞及び文小辞要素: *-ma(-)/-mu(-)/-mi(-)* “for me”; *-tu(-)* “for him”; *-ma(n)za(-)* “for them”; *-sa(-)* “he”; *-na(-)* “him”; *-ta*(文小辞): 大城・吉田(1990); Payne(2004) 参考。
- 6) 実際の象形文字表記としては *-ra* や *-ri* を示す単独の文字は存在しないので、前置された文字に付加する記号(文字整理番号 Nr. 383 \ )によって *-ra* または *-ri* の両音価を示す合字文字 *-ra/i* として記述される。それ故、前接的人称代名詞 *-ata/-ara* と 3 人称単数過去形語尾 *-ta/-ra* の *-ra* 表記、奪格の単数/複数語尾 *-ati/-ari* と 3 人称単数現在形語尾 *-ti/-ri* の *-ri* 音価はどちらも合字表記 *-ra/i* から文脈分析によって *-a* 母音形か *-i* 母音形かが決定されたものである: 特に、Morpurogo-Davies(1982/83) 参照。
- 7) Allc 5 : AUDIRE+*MF-ta*/*ra/i-ru* の語形は *r* 転化形ではなく、例外的に *-rr-* の重複した中受動 3 人称単数命令形 (<\*AUDIRE+*MF-ta(r)ru*)。

参考文献

- Hawkins, J. D. (1995) *The Hieroglyphic Inscription of the Sacred Pool Complex at Hattusa (SÜDBURG)*, Wiesbaden.
- , (2000) *Corpus of Hieroglyphic Luwian Inscriptions*, Vol. I. Berlin.
- , (2003) "Scripts and Texts" in Melchert (ed.) 2003, 128-169.
- Laroche, E. (1956) "L' inscription Hittite d' Alep", *Syria* 33, 131-141.
- Melchert, H. C. (2003) *The Luwians*, Leiden.
- Morpurgo-Davies, A. (1982/83) "Dentals, Rhotacism and Verbal Endings in the Luwian Languages", *KZ* 96, 245-270.
- Oshiro, T. (1993) "Notes on Hieroglyphic Luwian", *Oriens* 29, 45-56.
- , (2010) "The Hieroglyphic Luwian *-si* Again", *Lingua Posnaniensis* 52/1, 67-70.
- 大城光正 (2008) 「象形文字ルウィ語の碑文書記による表記の誤謬について」『古代オリエントの楔形文字言語間の言語接触の研究』（基盤研究 B:平成 16~19 年度科学研究費補助金研究成果報告書）, 35-47.
- 大城光正・吉田和彦 (1990) 『印欧アナトリア諸語概説』大学書林.
- Payne, A. (2004) *Hieroglyphic Luwian*, Wiesbaden.
- Poetto, M. (1993) *L' iscrizione luwio-geroglifica di Yalburt*, Pavia.